

31 人・7 チームで 69 軒を訪問

「10 年前の恩返し」 全国の仲間と被災地へ

8 月 16 日、31 人・7 チームに分かれ、被災した仲間 69 軒を訪問し、被害状況の聞き取りや支援物資の配布を行いました。

この日の行動には、京建労の野島書記次長も参加。「久留米の実家に帰省しているから」と、車走

らせ支援に駆けつけてくれました。

訪問先では、今なお厳しい生活が続ける仲間の姿がありました。家全体が傾き、玄関の施錠もできないまま、やむなく自宅で生活している仲間は、「ここで生活するた

めに、なんとか一部屋だけは片づけた。柱も斜めに傾き、部屋の土壁は余震で毎日崩れている。傾いた玄関のひさは、息

子の知り合いからもらった廃材をつつかえ棒にして支えている」と話します。地震発生時は家族全員が外出していたためケガを免れましたが、「あのとき家にいたら…」と振り返りました。水はなんと

出るようになったものの、近くのスーパーは営業しておらず、生活に

片付けが進まず玄関をブルーシートでふさぐ

玄関ひさを つつかえ棒で支える

必要なものを買うために一時間以上かけて出かけています。届けられた仲間からの支援物資を「助かる」と喜んで受け取ってくれました。



被災した自宅に住めず、事務所で仮住まいを続ける中川さん夫妻





何から始めればいいのか…

「家の片付けは手つかずです。あまりにひどすぎて、何から始めればいいのか…」自宅の隣にある事務所で避難生活を送っている仲間の声です。

1週間にわたり車中泊を続けた仲間もいました。

余震が続くなか、子どもたちの心にも深い影響が出ています。「中学生の子が不眠になり、3時間くらいしか眠れない毎日が続いている…」また、通信障害によって

仕事に大きな影響が出ている仲間もいます。

「周辺一帯の通信障害で、電話もインターネットもつながらず仕事ができない。インターネットカフェに行つて仕事先と連絡を取っています」

地震による被害は住宅だけではなく、避難生活、子どもたちへの影響、仕事や暮らしなど、時間の経過とともに新たな困りごとも見えてきています。



水を届けながら
小川分会の
仲間を訪問



8月16日、小川分会の組合員12人の安否と被災状況を確認するため、訪問行動を行いました。

最初に小川町の中心部を回りましたが、通行止めや交通規制が続き、組合員宅の中にはほぼ全壊の状態で近づくこ

とさえ難しいところもありました。直接会うことができなかった仲間の家には、災害対策本部の水田さんが水を抱えて向かい、不在票とともに玄関先へ届けました。その後、迫田さん、汐崎さん、古森さん、緒方さんと直接話をする事ができました。聞かれたのは、やはり「水で困っている」という切実な声でした。

「特に高齢者は、給水場所まで水を取りに行くのが大変だと思う」「地域の小さな公民館にもタンクを置いて給水してもらえれば、高齢者も助かる」と、現在の給水体制についての要望も寄せられました。

この日は赤旗新聞の記者も同行。被災した仲間の声や、被災地で続いている労働組合の支援活動を全国へ伝えようと、一人ひとりの話を熱心に聞き取っていました。

自分が困ったときに支えてくれた組合への感謝を 今度は被災した仲間のために―― 支援行動に参加した仲間の声

いつもアスベストのことで組合にお世話になっています。思い返せば10年前の地震のときも、安否確認のためにわざわざ訪ねてきてくれました。そのときの温かい気持ちが今でも忘れられません。被災した仲間のお宅を訪問する際の道案内や、訪問先での声掛けなどで支援に参加しています。【東部支部 広安分会 長谷守】

10年前の地震のとき、組合の仲間が応援に駆けつけてくれ、3日間で片付けがすんだ。今回はその時の恩返しです。



東部支部 託麻分会長
馬原伸二

病気をしたときに組合には大変世話になりました。そのときの感謝の気持ちを、組合の仲間への支援で返したい



菊鹿支部 山鹿分会
垣田知治

「暑いのに回ってきてくれて」 仲間のつながりを実感

8月12日、娘と一緒に熊建労働の災害ボランティアに参加し、宇城市の組合員宅12軒を訪問しました。支援物資を届けながら、被害の状況や困りごと、必要な支援などを一軒一軒聞き取りました。外から見ただけでは分からなくても、家の中では壁に亀裂が走り、玄関の土間がずれているところも。「まさに活断層の上に家があるのでは」と思うほどの被害を受けたお宅もありました。地震でサッシが閉まらなくなり、自分で外側に枠を取り付けて使えるようにしたという仲間もいました。そこは「さすが建築職人」と感心させられるところでした。

一方、生活の大きな負担となっているのが水です。「二番水が欲しい夕方から朝方まで断水するので困っている」との声も聞かれました。訪問先で子どもたちに支援物資を渡すと、「今日、これ食べよう」とうれしそうに声。その健康な姿に、こちらが救われるような思いになりました。

ブルーシートや土のう袋など、必要としているものは一軒一軒違います。だからこそ、直接訪ねて話を聞くことの大切さを感じました。あるお宅では帰りに「大変だなあ、暑いのに回ってきてくれて」と声をかけられ、駐車場になっっていたぶどうを逆



▶自宅駐車場になっ
ていたぶどうをいただきました

【東部支部

関根涼代】